

アンケート調査によるトーストの嗜好の分析

○早川文代* 佐藤秀美 畑江敬子** 島田淳子**

(*小田原女短大 **お茶の水女大生活)

【目的】先に、テクスチャー、焼き色の異なる種々のトーストを試料に訓練パネルによる官能検査を行った結果、好ましさは焼き色に依存することが示唆された¹⁾。本研究では、この結果を検証することを目的として、消費者パネルを対象としたアンケート調査を行った。併せて、トーストの焼き色の嗜好と食生活との関係についても検討した。

【方法】消費者パネルとして、おもに首都圏に在住する短大生とその家族 800 人を対象とし、1997 年 7～8 月に留め置き法によりアンケート調査を行った。14 段階の焼き色 (L 値 15.3～72.3) のトーストの写真を並べ、好ましい焼き色を単数回答および複数回答の二通りで選択させた。併せて、トーストを食べる頻度、焼く頻度、使用するパンの厚さ、年齢、性別について質問した。回答を単純集計およびクロス集計し、アイテムカテゴリー間の独立性およびパネル間の一致性の検討を行った。

【結果】単数回答、複数回答とも、好ましい焼き色の最頻値は L 値 59.7 のトーストであり、先の訓練パネルの実験結果とよく一致した。また、使用するパンの厚さ (4、6、8 枚切) およびパネルの属性 (性別、年齢) が異なっても焼き色の好ましさの分布に差は見られなかったことから、その共通性、汎用性が示された。一方、極端に薄いまたは濃い焼き色を好むパネルは、好ましさの許容範囲が狭いなど、特徴的な回答パターンも見られた。さらに、家族内の嗜好の異同について詳しく検討したところ、母親世代と娘世代の回答パターンの類似、祖父母世代の嗜好傾向の孤立等、トーストの焼き色の嗜好と食生活に関する特徴が見いだされた。 1) 日本調理科学会平成 8 年度大会研究発表要旨集 P.52